

研究課題	つながりを大切にしたら考える国際貢献への取組
副題	～E S Dの視点からグローバルな生徒を育てる I C T教育～
キーワード	「学び」「地域」「対話」「I C T活用」「自己有用感」「Skype」
学校名	北海道立小樽高等支援学校
所在地	〒047-0261 北海道小樽市銭函1丁目10番1号
ホームページ アドレス	http://www.otarukoushi.hokkaido-c.ed.jp

1. 研究の背景

本校は、職業学科を有する高等部単置の高等支援学校として平成21年4月に開校した。学科編制にあたっては、近年の産業動向・産業構造の変化に伴い、生徒の卒業後の進路動向も変化してきている現状から、北海道で初めて「環境・流通サポート科」「福祉サービス科」「生活技術科（現在は生産技術科）」の新設学科、併せて従前より設置されていた「木工科」「生活家庭科（現在は家庭総合科）」の5学科を設置し、スタートした。

本校の生徒は中学校知的障害特別支援学級からの生徒が約6割、自閉症・情緒障害特別支援学級からの生徒が約3割、通常学級からの生徒が約1割の割合で在籍している。また、150名の在籍生徒のうち、96名の生徒が寄宿舎（定員100名）で生活している。

本校での学校生活で「頑張りたいこと」として「人間関係づくり」「コミュニケーション」を6割の生徒が挙げている。保護者も「伸ばしていきたい力」として同じ2項目を挙げている。この希望に添うため、学校関係者との関わりに止まらず、来校者や「地域」の方との「対話」をより多く経験することで日ごろの「学び」の深まりを図っている。

また、キャリア教育の推進・充実を図るため、開校当初から「地域の教育力を活かした教育活動」を推進してきている。各学科の活動内容については、次のとおり。

（表1）「地域の教育力を活かした活動」（一例）

学科名	活動内容
生産技術科/ 生活技術科	・地域の商業施設等のコップへのグラス加工。 ・通学路等の環境整備。 ・地域の催事への再生紙の提供。 ・地域企業への就業体験。
木 工 科	・地域の企業からの年末年始挨拶用カレンダーホルダーの製作・提供。 ・近隣町会のごみ集積箱の製作・提供。 ・地域の保育園・幼稚園へ木製おもちゃの提供。 ・地域の小学校へ卒業記念品の提供。（交流及び共同学習相手校）
環境・流通 サポート科	・近隣の海水浴場の環境整備。（清掃） ・近隣の共同住宅、学校等の環境整備。（窓拭き、除草など） ・地域の独居老人宅の環境整備。（除排雪） ・地域のニーズに応じた製本作業・納品。

	・国内被災地支援活動。
家庭総合科/ 生活家庭科	・地域の保育園へ布製おもちゃの作成・提供。 ・製菓実習で製造したパンを地域の企業にて販売。 ・カフェの販売向けパンの製造。
福 祉 サービス科	・カフェ営業。（校内に地域の方をお客様として迎える活動） ・カフェ営業に伴って、翌月の営業、取扱商品などのポスティング。 ・地域企業への就業体験。

これらの活動を推進する中、平成 27 年林野庁主催の木育キャラバン札幌大会に本校木工科の製品展示の依頼があった。寄せ木を駆使した製品であったこともあってか、その際基調講演をされた東京おもちゃ美術館長の多田千尋様より「ふれあい囲碁セット」（写真 1）の製作を依頼された。東京の N P O 法人「ブリッジ・エーシア・ジャパン（以下 B A J）」がミャンマーの小学校 100 校に図書やおもちゃを寄贈する企画「ブック＆トイ ライブラリー 100 プロジェクト」への参画依頼であった。平成 27 年度に 20 セット、平成 28 年度に 40 セット、平成 29 年度に 40 セット、平成 30 年度に 10 セット製作し、B A J に寄贈活動をお願いしてきた。年度を追うごとに家庭総合科製作の中着やシュシュなども加えて寄贈することができ、活動の充実を図ることができている。初年度は寄贈報告会を実施していただき、生徒もどのように活用されているかを知ることができ、自己有用感、自己肯定感を体感できたと感じる事ができた。

写真 1



2. 研究の目的

報告会を受けた生徒は、ミャンマー、ふれあい囲碁、B A J や東京おもちゃ美術館の活動についてなど、その「学び」については教師や N P O の関係者との「対話」により、事後学習の中で深められたことを確認することができた。この活動を継承した後輩たちは、卒業生や教師からの情報を元に、自分でイメージしながら取り組むことになった。現地での贈呈式のたびに法人からその様子を撮影した写真をいただき、紹介していた。

しかし、生徒のイメージに頼る部分が多く、生徒には役に立っているという実感が初年度の生徒のように感じる事が難しかった。本校でもここ数年、I C T 機器を活用した学習が少しずつ進められてきているが、生徒の学習用のパソコンが 8 台で、使用場所も限られているので、充実しているとは言い難かった。

先方の法人の協力を得ながらタブレット P C 等を活用して、報告会や現地ミャンマーとのやりとりをする中で、初年度とは違った生徒の自己肯定感・自己有用感の体感を得る機会となればと本助成を申請した。

3. 研究の経過

前述のように、生徒にとっての自己有用感・自己肯定感の体感に向けて、本研究助成申請から次のような取組を進めてきた。

（表 2）平成 29・30 年度 本取組の経過

時期	取組の内容
平成 29 年 11 月	【木工科】 ふれあい囲碁セットの製作（40 セット） 【家庭総合科】 シュシュの製作（80 本）

平成 30 年 3 月	○ふれあい囲碁セット、シュシュの送付（東京おもちゃ美術館へ） ○本研究助成決定
平成 30 年 4～5 月	○本研究助成 校内プロジェクトチームでの検討委員会 （タブレット購入時期、購入台数、使用にあたって必要な物品等）
平成 30 年 5～6 月	○S k y p e を介しての交流先の開拓 （現地日本人学校、東京おもちゃ美術館、現地 NPO 事務所）
平成 30 年 6 月～	【家庭総合科】 ミャンマーアワー（ミャンマーに関する異文化理解学習）開始
平成 30 年 6 月	○タブレット P C 購入（第一次：4 台）手続き
平成 30 年 7 月～	【木工科】 本プロジェクトの変遷についての学習開始
平成 30 年 7 月	○タブレット P C 納品（第一次：4 台）、設定等
平成 30 年 10 月	【木工科】 タブレット P C を活用したミャンマーに関する異文化理解学習実施 ・グループごとテーマに基づく調べ学習とポスター作成 ・グループごと調査結果の発表
平成 30 年 11 月	【木工科】 ・ポスターのデータ化 【家庭総合科】 ・浴衣製作、着付け方の動画撮影、ポスター発表（学校祭）
	【木工科】 ・ふれあい囲碁セットの製作
平成 30 年 12 月	・タブレット P C を活用した東京おもちゃ美術館からの贈呈報告会及び交流（製作過程の紹介など）
平成 31 年 2 月	【木工科】 ・現地 N P O との情報交換及び交流（贈呈の実績、活用の様子など）
平成 31 年 3 月	・ふれあい囲碁セット、浴衣の送付（東京おもちゃ美術館）

(1) S k y p e を介しての交流先の開拓

ア 5 月から 6 月にかけて行った S k y p e を介しての交流先の開拓では、ヤンゴン日本人学校に問い合わせを行ったが、通信インフラの整備に課題が多くあり、実際の活動を展開することの難しさがあった。

イ 東京おもちゃ美術館との今後の取組についての検討の際、この機会にタブレット P C を活用した贈呈報告会を実施できることとなった。

また、次の展開として、ヤンゴンの B A J 現地事務所を加えた 3 元中継の実施が検討された。

(2) 実施時期の検討

ア 9 月いっぱいインターンシップ実習、その後学校祭に向けた販売品の製作で追われるため、学校祭終了後の 12 月から交流をはじめることで確認をさせていただいた。また、各交流活動の事前事後には、活動に向けた情報収集等の事前学習と振り返りの事後学習を実施した。

4. 代表的な実践

(1) グループワークによる活発な「対話」の展開

購入したタブレットPCを活用し、ミャンマーに関わる異文化理解の学習を実施した。ついで調べ学習を行った。14名を4グループに分け、「地理・気候」「食べ物・名産品」「文化・建物」「歴史・人物」それぞれを担当して調べた。これまでは、教師からのミャンマーや寄贈先の小学校の説明による生徒のイメージのみであったものであったが、実際に自分たちでキーワードを探し出し、行き着いたミャンマーに関わる画像などによる情報を得ながら、自身のイメージと比較してどうであったかなど、活発なグループワークが展開されていた。(写真2) また、生徒たちでアイデアを出し合って国旗を書き写すなど、それぞれの思いを形にする活動にまで展開することができた(写真3)。生徒も普段使用しているパソコンとは違って、タブレットPCを興味深げに操作していた。

(2) Skypeを介した交流の実施

10月に調べたミャンマーについての情報を整理する学習を積み、いよいよタブレットPCを活用したSkypeを介しての東京おもちゃ美術館との交流を実施した。

挨拶を交わしたあと、まずは東京おもちゃ美術館の紹介をしていただいた。世界中のおもちゃの展示や特に力を入れているという木製のおもちゃの紹介をしていただき、生徒は「木のおもちゃ」というキーワードに、木工科所属の生徒ということもあって、興味津々な様子であった。続いて本題の自分たちが製作した「ふれあい囲碁セット」がどのようなところでどのように活用されているのか贈呈報告会を実施していただいた。パゴダやバカンなどの名所の写真なども織り交ぜての紹介であった。今までは、ミャンマーの小学生が囲碁をしている写真を見るのが主であったが、今回は実際に贈呈に携わった方の生の説明を加えた動画で見ることができた。これもICTならではの活動である。

そのあとの質疑応答の時間は、10月にいろいろ集めた情報とこの日に得た情報を整理して東京おもちゃ美術館の担当者の方との交流の時間となった。これまで取り組んできたミャンマーについての知識をこの日の報告や説明と照らし合わせ、待ち時間にグループ内で話し合い、順番がきたらまとめられた意見などを伝えることができた。囲碁セットについても同様の活動で応じることができた。何よりもタブレットPCそのものがまるで本当に対面しているかのような環境を導き出し、「学びに向かう力」を格段に高揚させていることは明らかであった。「調べ学習」だけでは得られない経験を

写真2



写真3

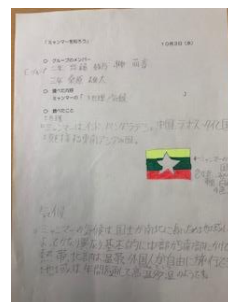


写真4



写真5



することができた。交流を終えての生徒も皆、満足げで、予告していただいた2月のミャンマーとの交流に期待をしているとの発表を聞くことができた。

(3) 東京おもちゃ美術館、BAJヤンゴン事務所との3元交流の実施

前回交流時の最後に予告のあった、本校と東京おもちゃ美術館、そしてBAJのヤンゴン現地事務所との交流が実現することになった。事前の連絡調整の中で現地では停電を心配する様子も見られ、電力供給の不安定さも知ることができた。

接続と同時に画像だけの交流が始まった。やはり3元中継は難しいのかとも考えたが、途切れ途切れになるものの、少しずつ先方の方の声が聞こえ始めた。挨拶を交わすにも、聞き取りにくい状況であったが、少々時間を要したが回線が比較的安定したときに、改めて調べた情報を投げ掛け、応答していただく活動を実施することができた。

自分たちが作成した、ふれあい囲碁セットの贈呈の進行状況について質問し、90校への寄贈が終了し2019年夏頃に全小学校に渡ることをお答えいただいた。順調にプロジェクトが遂行されている様子を耳にし、懸命に製作した生徒たちは緊張の表情から、安堵の表情になった。まさに、生徒たちが自分の活動が役に立っているという「自己有用感」を味わった瞬間であろう。気分も高揚し、事前に調べたミャンマーの挨拶「ミンガラバー」と挨拶する生徒が現れ、時間の経過と共に楽しくも活発な交流が深められた。

途中で音声途切れることや音声小さいことも実証され、今後さらなる環境の整備や音量を確保する装置などの準備が必要なことも検証することができた。

写真6



写真7



5. 研究の成果

この研究で得られた成果は次のとおりである、

- (1) 生徒にとってタブレットPCはパソコンとは違った興味関心のある教材であることが確認することができた。特別教室に移動しての学習ではなく、場所を限定されず日ごろ活動している教室で活用できることも、学習とマッチングしながら進めることができ、非常に効果的であることが分かった。
- (2) これまでは生徒のイメージ先行で進めてきたミャンマーへの寄贈プロジェクトであったが、タブレットPCを活用した交流により、そのイメージとの比較と確認をすることができた。関わる方とのSkypeを介した情報交換をすることができ、このプロジェクトに対する体感をより深めることができた。
- (3) これまで本校では実現することができなかった、新たなICT機器の活用を図ることができた。これで得た情報をグループワークでポスター作成につなげることで情報活用能力の向上と新たな協働の姿勢を身に付けることもできた。
- (4) この活動全般を通じて、日ごろのものづくりの活動が、近隣地域や教材の乏しいミャンマーの小学校で活用されていることを肌身に感じることができ、生徒の自己有用感や自己肯定感を高めることにもつながった。
- (5) 流通分野の学習を進める中で、タブレットPCを活用して日本国内の自然災害の被災地と特産品を調

べて注文をし、学校祭で販売学習につなげる学習もミャンマープロジェクトと合わせてE S Dの取組として進めることができた。

6. 今後の課題・展望

現地のインフラ事情と寄贈地区のタイミングが合わず、残念ながら実際にふれあい囲碁セットを寄贈した小学校との交流は実現できなかった。しかし、東京おもちゃ美術館とのパートナーシップにより次年度以降挑戦してみることで確認ができています。

これからも日ごろの製作活動と貢献活動のマッチングをしながら、活動を後輩たちに引き継ぎ、持続可能な活動として取り組み続けていくこととなる。

また、タブレットの有用性を最大限に活用できるよう他の授業でも活用を図っていきたい。併せて、校内の人材を活用して、タブレットP C使用に関わる研修会等も必要になる。

E S Dの推進校として開校以来取り組んできた「地域の教育力を活かした活動」(表1)のねらいを大切にしながら「持続可能な開発目標(S D G s)」の考え方を取り入れ、それぞれの活動に取り組んでいきたい。

7. おわりに

パナソニック教育財団の実践研究助成において、本校の実践の有用性を確認することができた。あわせて、本校のI C T環境を飛躍的に改善することができた。これらの多大なる御支援をいただいたことに心より感謝の意を述べ、本研究の成果報告とする。